

婦人科一般診療を主とする産婦人科クリニックの実際 —祖父から続く同門卒の3代目として—

松本産婦人科医院 松本直樹

本庄市児玉郡医師会の皆さまには日頃より大変お世話になっております。私は2015年8月から本庄市千代田にある松本産婦人科医院をリフォーム・後継し、産婦人科を標榜する無床診療所の院長として診療しています(写真1)。当院の歴史を簡潔に説明します。戦地(広東)より復員した祖父・松本^{ツネヨシ}包嘉(東京慈恵会医科大学(慈恵医大)S15卒)が、1950年(S25)ごろに主に分娩を取扱う有床の産婦人科診療所を本庄市銀座で開院しました。戦後の分娩とその近代化を支えてきたようです。しかしながら1970年(S45)に祖父は脳卒中で急逝。その数年後、父・松本^{ツネヨシ}常嘉(慈恵医大S43卒)が後継し、1978年(S53)に現在の場所(本庄市千代田)に有床の産婦人科診療所を設立(写真2)。昭和後期から平成前期の当地域の分娩需要に長い間応えてきました。私が小中学生ぐらいのころは特に忙しく、分娩数が月50件近いときもあったようです。分娩需要の減少や分娩にかかわる社会的な状況の変化もあり、2007年に分娩取扱いを終了し、以降は主に婦人科一般診療を行ってきました。そのような中、私も1998年(H10)に慈恵医大を卒業し同産婦人科医局に入局しました。大学病院・関連病院勤務を経た後に退局。高崎の^{ツテデバリ}館出張佐藤病院に3年間勤務したのち現職に就きました。

私は幼少期より父がほぼ365日24時間で働いている姿を間近で見てきたので、自分はそのような生

活はしたくないと決めていました。しかしながら悩んだ末に産婦人科を専攻し、多分に漏れず月10日以上^の当直や72時間連続勤務当たり前の過酷な産婦人科勤務医時代を経験することになりました。近年では働き方改革にみられるようにもう少し人間的・常識的な労働環境が担保されるようになってきていると思いますが、産科に携わる医師数が足りないことには変わりありません。私の中では最終的にも、小さな診療所でそれこそ医師一人で過重・過長な労働・拘束を伴う妊娠・分娩管理を扱う意向にはなりません。しかしいよいよ診療所を後継するとなると、分娩も生殖医療(体外受精)も扱わず経営していくことに対する不安もありました。そのため対応可能な範囲で幅の広い診療を行えるよう準備し心がけ、並行して女性ヘルスケア専門医・指導医、乳腺疾患認定医を取得しました。現在の診療内容は、婦人科一般診療、女性内科(貧血、生活習慣病、骨粗鬆症など)、不妊管理、妊婦健診、ピル等避妊指導、地域の頸がん検診・健康診断、乳房超音波検診、日帰り手術(中絶、流産、円錐切除、マイクロ波子宮内膜焼灼術(MEA))、予防接種等です。

院長として診療を始めてから8年が過ぎました。産婦人科の同僚からよく聞かれる質問に「婦人科一般でやっていけるの?」があります。産婦人科の開業で稼ぐには、分娩取扱いか生殖医療と相場が決まっているからです。このような質問に対しては現状

「薄利多売ですがなんとかやっています」と答えることが多いです。参考として当院の診療データを示します。最近1か月間の初診問診票を集計すると、年齢分布として20歳代が最も多く、次いで40、30歳代でした（図1）。地域の頸がん検診を除いて、初診時の診断または主訴で分けると「月経関連症状・PMS等（39歳まで）」が最も多く、次いで「膣炎・STD」、「月経関連症状・更年期等（40歳以上）」でした（図2）。2022年の収入における内訳を分類してみると保険診療が75%を占め、以下地域頸がん検診、自費ピル等、妊娠中絶と続き、ここまでの収入のほとんどを占めました（図3）。

保険診療において、婦人科一般診療の追い風は2020年に新設された婦人科特定疾患治療管理料です。器質性月経困難症に対するホルモン療法を行う際に3～4ヵ月おきに算定しています。いままで加算を取りにくい婦人科一般診療において極めて大きな前進でした。治療用の低用量ピル（LEP）を中心にジエノゲスト、レルゴリクス、子宮内黄体ホルモン放出システム（ミレーナ）などを積極的に活用し月経困難症の薬物治療を行っています。また婦人科的貧血にも注力しており鉄剤投与、LEP等に加え、過多月経に対するMEAも行っています。現在まで約50例のMEAを実施し、その短期的な有効率（術後1年）は94%でした。

子宮頸がん検診（主に本庄市児玉郡の個別検診）を応需しておりまた精査も行っています。その2022年の要精査率は5%、自院での精査実施率は98%で、子宮頸部異形成（CIN）軽度以上がそのうちの60%（既知のCINを含む）、CIN高度以上は3%でした。また子宮頸がんの定期予防接種（HPVワクチン）が再開となりました。産婦人科医が中心となり対応すべき部分と思い日々推奨し接種していま

す。

人口妊娠中絶は変わらず多くのニーズがあります。静脈麻酔下・電動式吸引法による手術を行っています（本庄児玉郡市医師会誌2023;72:114-121）。希望者が受診するたびに産むことを再考するよう諭すのですが、残念ながら出産に切り替える方はごくわずかです。望まない妊娠を繰り返さないための術後の避妊指導までサポートするようにしています。

私は3代目院長に就きましたが分娩を引き継ぐ力はありませんでした。それでも歴史ある医院の院長の立場から、地域の女性のためになるよう、最新の医学知識に基づいたより良い医療を提供し続けたいと思います。

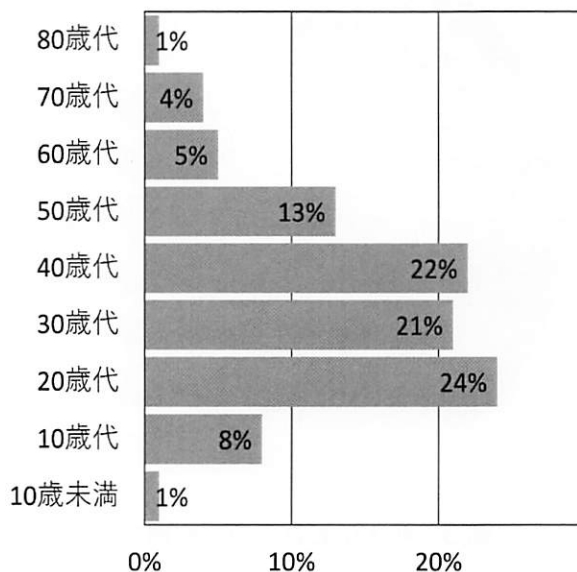


図1 初診患者の年齢分布

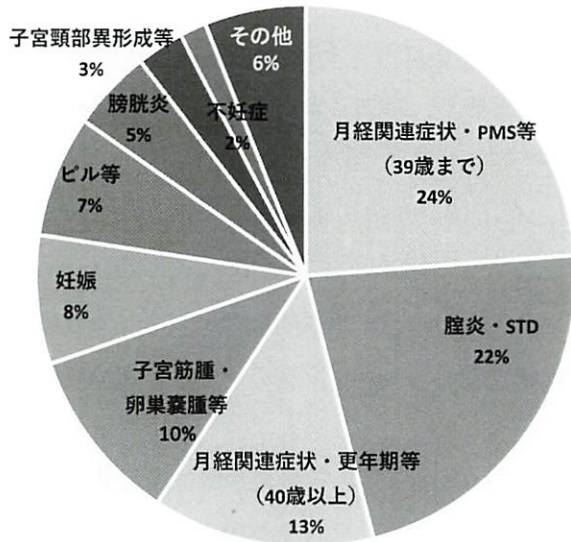


図2 初診時の診断または主訴
(PMS：月経前症候群, STD：性感染症)



写真1 現在の当院外観

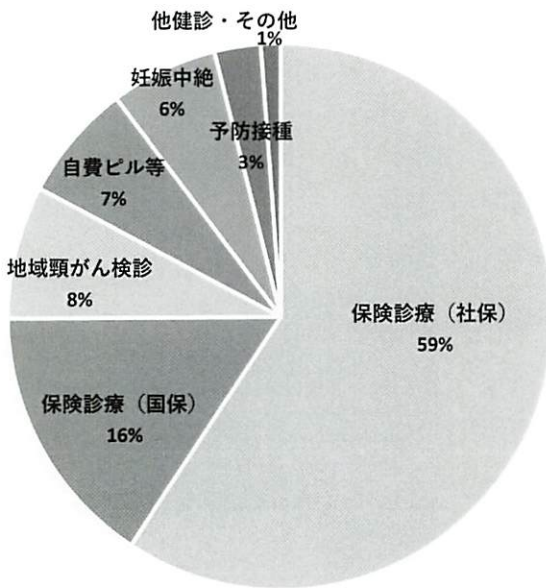


図3 収入における内訳割合



写真2 以前の当院外観

本庄市児玉郡医師会誌

一般社団法人 本庄市児玉郡医師会 2024 No. **73**



本庄児玉郡市医師会誌 第73号

令和6年7月15日発行

発行人 鈴木和喜
編集人 池田誠
発行所 本庄市児玉郡医師会
〒367-0061
埼玉県本庄市小島6-8-8
TEL 0495 (21) 3511 (代)

印刷所 (有)本庄孔版社
〒367-0026
埼玉県本庄市朝日町3-15-23
TEL 0495 (22) 4436

編集委員 鈴木和喜
池田誠
服部浩一
黒岩茂夫
西澤良雄
清水由紀夫
山田伸夫
野澤章夫
高山俊明
春山陽太郎
編集顧問 高橋茂雄